

動労千葉と国労を破壊し、 動労本部組合員を売り渡して

「革マルだけ生きのびればいい」 なる「スト・反動路線」

日刊 動労千葉

85. 6. 11

No. 1961

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六（公衆）〇四七二二七二〇七

動労本部組合員を弾劾する

動労「本部」第四一回全国大会運動方針案は、「分割・民営化」と十万人首切りの国鉄労働運動解体攻撃に闘わずして全面屈服し、「三本柱の組織的クリアーの強化と、骨身を削る取り組みの積極的推進」を唯一の運動「方針」として、「産報化」の先兵となつて動労千葉や国労に襲いかかることを宣言している。

早くも「分割・民営化」答申受け入れを前提に「次なる闘い（屈服）の準備」

「運動の基調」の特徴は、冒頭に書かれた「国鉄再建監理委員会」答申を直前にし、

「余剰人員の解消」をおこなう全過程での解雇と国鉄労働運動の変質、破壊など、さしこまれた攻撃にたいし、われわれはこの間のたたかいで得た一切の教訓と、かちとった成果、つちかった組織力をもつて組織一丸となつて取り組み、そのことをとおして組織の団結を一層強化し、戦線を拡大し、質を高め、次なるたたかいを準備していくことを目指さなくてはなりません。

と示されていることに示されているように、「分割・民営化」と十万人首切りという未曾有の攻撃を目前にして、国鉄労働運動の命運をかけ、自らが主体的に闘いに決起し、情勢を切り拓こうとする決意と具体的方針などどこにも見当らないばかりか「次なるたたかいの準備」などと、早くも逃亡を図っていることである。

彼らが「この間の闘いで得た」「教訓」「成果」「組織力」とは一体何か？ それこそ、組織をあげて自民党・監理委の前に頭をたれ、国鉄当局の奴隷となつて、高令組合員を追い出し、若年組合員を私企業に売り渡し、マル生運動の全面開花の下で、少しでも疑問・不満を述べる組合員を当局と一緒にだんどん辞めさせ、処分し、勤務差別を押しつけるという恐怖・恫喝政治「フアッシュ」支配によつてかろうじて外形のみ支えられているにすぎないボロボロの疑心暗鬼・相互不信の「組織力」以外の何ものでもない。

矛盾と破産とペテンと居直り
「冬の時代論」の中で「ストで闘う？」

動労「本部」革マルは、「方針案」のいたる所で「解雇攻撃にうつつでてくることがあればスト

ライキで闘う」「一定の段階において反転、反撃のたたかいに決起する」と述べている。しかし、それらの箇所はいずれも意識的に「カッコ」つきで書いており、文字通り、最初から闘う気などない「ゴマカシ」にすぎないのだ。

革マル分子が「最後はストで闘う」というならば、「動乗勤」や「三本柱」が提案し強行される時点で国鉄労働運動の総力を結集して闘うべきであったのであり、追い込まれた末での闘いの困難性・打撃はそれ以前の比ではないことは過去の歴史が証明している。否、「産報化」にむけた中首根・国鉄当局の首切り攻撃に必死で反撃する国労や動労千葉の闘いに敵対し、足を引っ張り、圧殺しようとしたのは他ならぬ革マル分子であり「ストで闘う」などまづたくのペテンなのである。

恥も外聞もなくこんな見えすいた矛盾とペテンをもてあそばねばならないほど今日の動労「本部」の（「冬の時代論」↓「三本柱クリアー運動」という情勢認識・実践方針の大破産と動労組合員の指導部不信・不満組織的危機は極めて深刻なものとなつて満天下に示すものである。

「革マルだけ生きのびればいい」との
反動方針

従つて、「具体的取り組み」は「社会党・総評の指導のもとに、新産別に所属し公明党を支持する全労との共闘強化を基礎に」とか、「総評大会を国鉄問題を最重要課題としてすえた意志統一をはかる場とする」とか、日頃、忌み嫌らう社会党・総評にゲタをあずけ、早くも「裏切りの口実」造りを並べたてているありさまである。

結局のところ、革マル分子は労働者の闘いによつて情勢を切り拓くという方針は決して立てない（「メッタメッタにやられるから立ててはいけない」）のであり、それどころか、動労千葉や国労の組合員、さらには革マル分子に組まない動労組合員等々の首切りとひきかえに自分達革マル系分子だけは生き残ろうと、一大裏切りに走ることは明白である。労働者の敵「動労「本部」革マルをすべての職場から掃しよう。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ！